

婉という女

大原富枝

婉という女

大原 富枝



講 談 社

めん
婉という女



KODANSHA

昭和三十五年四月十日 第一刷發行

二九〇円

著者 大原富枝 おおはら とみえ

發行者 野間省一 東京都文京區音羽町三ノ一九

印刷所 豐國印刷株式會社 東京都文京區大塚坂下町二一四

發行所 株式會社 講談社 東京都文京區音羽町三ノ一九

振替 東京 三九三〇
電話大代表大塚(九四)三一一一

落丁本・亂丁本はおとりかえいたしません。

© T. Ohara 1960

(製本 大製)

婉
と
い
う
女

装
幀

近
藤
弘
明

第一章 赦免ということ

今日、安東家からお使者が見え、藩府からの赦免状を受けた。

お使者の歸つたあと、母上を中に、乳母、姉上、妹と相擁して泣いた。

泣くまい、泣くことはしまい、泣くこととは遠い氣持だ、と思いながらも、

涙がしだらなく流れてくる。

八十を越えた母上と、六十五歳の乳母、姉妹たちもみんな四十をすぎた老嬢おんなばかり、こうして相擁して泣いている涙も一人一人が別であつた。——いや、

しだけが、みんなと異う氣持かも知れない。

でとうございます」と、みんながいいあつて泣くのが、わたくしの氣持直に沁みてこない。わたくし自身も母上にはそう申しあげたけれど——五日前の六月二十九日に、弟の貞四郎どのが亡くなつてからは、今日の日のあることをみんな心待ちしていた。誰よりもわたくしが、殊に待つていた。心が灼けるように待ち兼ねていた。

弟が死ねば赦免がくる、ということ、わたくしは信じていた。

貞四郎どこの病が重くなり、とても恢復の望みの持てなくなつたとき、彼もそれをよく知つていた。

わしが死ねば赦免がくる、姉上、それだけがわしにできる孝行らしい……と彼はいつた。

——なにをいわれる、いまごろになつての赦免がなにになりましたよう、母上もわたくしたちも年とりました、變つたことが起るということがいまは不幸と

いうことなのです。このまま、このまま、何事も變らず、何事も起らずに暮せることが仕合せです。何よりも生きねばなりません。お前さまが元氣になつて、生きてくれることです。

と、わたくしはいつた。

ほんとうにわたくしはそう考えていた。四十年を過してきたこの獄舎に、これからも生きてゆこう。五十になつても六十になつても生きている。七十歳になつても、母上のように八十を越しても、わたくしはここに生きていようと考へていた。

そのことにひとつの痛烈な皮肉——誰にでもない、わたくし自身に對しての——のような、歡びのような、安らぎのようなものさえ感じていた。

「野中婉、四歳にして獄舎に囚われ、九十歳の生涯をここに置く」

もしも墓碑銘を刻むことが許されたら、そう記して貰おう。ここに生くではなく、置く。わたくしは遂に生きたことはなかつたのだ。

弟は生後わずかに五^ヵ月のとき、乳母に抱かれて獄舎に囚われの身になった。そうしていまは四十歳の男になり、死のうとしている。

わたくしたち兄妹は誰も生きることがしなかつたのだ。ただ置かれてあつたのだ。

四十年の間に、わたくしの兄姉は次々に死んでいった。きょうだい

6

しかも死というものは、「生きる」ことを許されなかつた人間にも、確實に訪れるものであつた。

ここでは、死は、生きるということがどういふことであるかを、よく知つてゐるものからの順で、訪れた。

姉上は兄妹のうちでは一番年上で、十八歳であつた。二年前に藩士の高木四郎左衛門どのに嫁し、愛し子も一人生きていたけれど、夫と子供から引き裂かれて、父上の血を受けた娘として罪囚のなかに加えられた。

兄妹のなかで、まず、生きたといえるのはこの姉上だけである。そして死は一番先に姉上に訪れた。

それでも姉上は三年間をここで生きていた。姉上がこの三年間を生き堪えたことは、姉上が生きているということがどういふことであるかを知つていたからであり、三年間以上を生き耐えることができなかったのも、生きるということの意味をすでに知つてしまつていられたからなのにちがいない。

姉上が亡くなつてから十二年目に、長兄清七どのが亡くなられた。三十一歳であつた。

それから四年目に次兄の欽六どのが亡くなつた。さらにそのあと十五年の歳月が流れた元禄十一年、わたくしの敬愛して止まなかつた三兄、希四郎どのが逝つてしまわれた。

弟はいまは野中家に唯一人残つた男子であつた。そうしてその貞四郎どのが死のうとしている。死なせたくない、とわたくしは必死にねがつた。

しかし、弟が死ぬにちがいないこともわかつていた。わたくしはこの幽居に、たくさんの死を見てきた。死の貌を、わたくしはよく知つてゐる。

貞四郎どのは、僅か五ヵ月自由な空氣を吸つただけで幽囚の身となり、四十歳で死んでいつたのだ。わたくしは息も窒りそうなほど悲しく哀れでならなかつた。

けれど母上が、それでもう野中家も絶えた、生きて甲斐なし、一緒に死の

う、といったとき、わたくしは勃然と憤おろしくなつた。

わたくしは生きてゆくつもりだ。八十までも九十歳までも生きてゆく、と思つた。

母上の自害を思い止まらせるために、わたくしはさまざまのことを口走つて慰撫しなければならなかつた。

いまここで母娘姉妹自害して果てては、哀れな弟の死骸を覆うてやる人もない。父上や次々に死んでいつた兄上たちの靈を慰める手段もない。わたくしは生きて赦免を待ち、野中家の死者たちのための家をつくりたい、と口説いた。口説いているうちにわたくしは自分の心が赦免のくることを信じ、待つ氣になつてゐるのに氣がついた。

赦免になつて、新しい世界へでていつて、ほんとうに生いけることができる、始めて生いけることができる、とわたくしの心は燃えはじめていた。

それからの二ヵ月餘りの日々は苦しかった。今日か、明日か、と赦免を待つ

心は、この四十年の、わたくしがここに置かれてあつた歲月よりも息苦しかった。

生き残つた三人の姉妹のうち、姉上と妹は同腹のきょうだいであつた。

二人はわたくしのように赦免を待ち望んではいなかった。——ほとんど迷惑に思つていた。彼女たちはいつた。

いまさら自由になつて何としましょうぞ、路頭に迷うばかりでございます。

このまま、生涯をここで終る方がようございます。

見たこともない新しい世界への不安と怖れは、勿論わたくしにもあつた。ましてこの四十をすぎた異腹の姉妹たちは、もはや生涯を終つていた。一度も生きることなく、彼女たちはすでに生涯を終つていた。

わたくしはちがう。わたくしはこれから始めて生きようとしているのだ。赦免を待つて高知の城下町に歸ること、あの方に逢うことができること——

わたくしの魂と胸はいつも小波立つていた。そしてそのことを二人の姉妹た

ちに用心深く匿^{かく}していた。わたくしは祕かに信じてはいたけれど、ほんとうに赦免がくるものかどうかは誰にもわからなかつた。

その赦免がついにきたのだ。

みんなが昂奮していた。赦免を待つてはいなかつた、ほとんど迷惑に考えていた姉上と妹も、いまは烈しく揺すぶられていた。

幽囚のうちに死んでいつた兄弟たちの靈に燈明をあげ、わたくしたちは夜が更け果てるまで話しあつた。五人の、二人は老い果て、三人もまた決して若くはない女たちは、泣き疲れ、しやべり疲れて、明け方近くなつてから、二つの部屋に分れて寝についた。

母上は疲れ果てたように、間もなく破れた草笥のような、かすれた小さい寢息を立てて眠つた。

わたくしは暗闇の中で微かに笑いが浮んできた。

ついに赦免がきた。

——父上という一人の激越な理想家、理想を追つて短かい生涯をお仕置（政治）に賭けた男の、血に對するあの人々の執拗、無殘な憎しみも、ついに止む時があつたのか。

わたくし自身さえ、敵ながらいつそ見事だと感服した、あの父上の政敵たちの、徹底した憎しみの執拗さにも、最後にきて、この一點の感傷と脆弱さがあつたのか——

いや、彼の人々にとつては、こんどの赦免は、決して彼等の、父上の血に對する徹底した憎しみの執拗さを傷つけるものではないのだ。感傷などではさらさない。

男系絶えて野中家の血が絶えた、という解釋なのだ。四十を越す姉妹三人が残つていても、もはや子を産す能力はあるまい。ましてや、腹は借りも

の、なのだ。そうでなくて、どうして姉上の産んだ女兒が高木家に残ることが許されたであろう。

彼等にとつては、わたくしたち姉妹を幽囚として番兵をつけて警戒することが、いまは無意味になつたのだ。それだけのことなのだ。

わたくしたちは、ほんとうは人間の數にもはいつてはいなかつたのだから。

——皮肉な笑いがわたくしの口に浮んでくる。

結構でございます。お仕置（政治）だの、権力だのには、わたくしは何の興味もございません。わたくしはただそつと片隅で生きてみたいのでございます。一度だけ、生きてみたいのでございます。

あなた方は何も恐れるはるもございません。たかが四十女の一人、精いつばいに生きてみたとして、何の恐れることがございましょうか——

可哀そうな三人の兄上たちと、そして貞四郎どの、あなた方は男であつたから、赦るされなかつた。たとえば五十になろうと、六十歳になろうと、あなた方

が生きてある限りは、赦免は訪れなかつたはず。

あなた方は、男であつたから死ななければならなかつたのです。わたくしを生かして下さるために――

女であるわたくしは、いつそ氣樂に生きてみせましょう。四十の老嬢おんながどんなふう^{い、い、}に生きられるものか、わたくしにもまるつきりわかりませんけれども、ともかく生きてみせましょう――

わたくしは若くて死んだ異腹の姉上を慕わしく思う。顔はよく憶えていないけれども、色の白い靜かなひとだつたように思う。わたくしは幼かつたし、姉上は悲惨な運命にたたきつけられた日頃であつたのだから、この「靜かなひと」という印象は、本來の姉上とはちがつたものかも知れない。

ただ一つわたくしに鮮かに残る記憶がある。姉上の乳房のこと――

――臺所と乳母たちの部屋の境の障子のかげに、姉上が膝をつく姿勢で乳をしぼつていた。はつてくる乳に惱んでいたのだから、あれは幽囚の身になつて